慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 北魏における渤海高氏 |
| Sub Title | On the Kao families (高氏) in Po-hai (渤海) during the six dynasties period |
| Author | 尾崎, 康(Ozaki, Yasushi) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 1963 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.2 (1963. 3) ,p.243- 289 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000002-0243 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 北魏における渤海高氏

尾崎　康

## 一

ここで、渤海蓨の郡望の高氏について、その系譜を辿り、関連する諸問題を考えていきたいと思う。

さきに、魏書の成立の事情を究明した諸論考に学んで、北斉初期の政局について考えてみた。(1) その魏書の成立期は、北魏末の争乱が安定して、高歓の覇権が確定してくるとともに、名門出身の漢人が、その子の若い澄、洋の周辺に集まって、歓の死を転機に、これを擁立して新王朝の樹立を強行し、その主導権を握ろうとした時代である。そこには、当然、新たな支配体制の組織、支配階層の編成の問題がおこる。魏収の魏書も、その一端を担い、そのために穢史と呼ばれる事件をひきおこしたのであった。

そうすると、魏書列伝の構成を調べて、各家の列伝上の位置を確める必要を生ずる。それは、北魏と北斉創業期の功績を明らかにすることであり、また、支配層の漢人が魏晋以来の名門であってみれば、さらに遡ってその経歴を辿ることにもなる。

てはじめに、あえて渤海高氏をとりあげる。それは、おもにつぎの理由による。まず、これらの頂点にたつ北斉の文宣帝の高洋が、それがいつわりであることはすでに明らかにされているが、[2] 渤海高氏であると称し、魏書でもこれを列伝の重要な位置にすえているからである。ついで、そのためであるが、高氏は、魏書では異例の数の伝をもち、それが魏収の本貫規定の資料を含むからで、このことはすでに指摘しておいた。そして、北魏では、その創業期に諸豪族とともに、中葉に高允が、高歡の覇業に高乾の兄弟と父が、と、それぞれに活躍したからであり、これらについてもすでに先学の諸研究がある。[3]

しかし、高氏の場合は、その活躍がほとんどこの北魏の時代に限られたために、北魏以前についても展望はするが、やはり魏書を中心として、その支派ごとに、北魏における渤海高氏を追うことになる。

なお、系図は、だいたいにおいて一括して掲げることにした。[4]

## 二

高氏の起源については、新唐書宰相世系表（巻七一下）が、

高氏、出自姜姓。斉太公六世孫文公赤、生公子高。孫傒、為上卿、与管仲、合諸侯、有功。桓公、命傒、以王父字、為氏、食采於盧、謚曰敬仲。世、為上卿。

と、紀元前七世紀、斉の桓公の時代、文公赤の曾孫の傒に遡ることをいう。

この説は、これより早く、唐代の中葉には行なわれていたもののようで、簡単ながら、元和姓纂にみえ、[5] 南平郡王高崇文神道碑（元和四年・八〇九）や、高元裕碑（大中六年・八五二）などにもある。[6]

高傒の名は、斉の貴卿として、春秋にはしばしばあらわれ、諸公の結盟に活躍している。[7] 新唐書宰相世系表は、引きつづいて、つぎに掲げるように世系を示すのであるが、そのなかの固、厚、止の名は、おなじように春秋にみえる。[8]

（新唐書巻七一下宰相世系表下）

太公望呂尚……（六世孫）文公赤—高—○（斉上卿 世為上卿）—傒—荘子虎—傾子—宣子固—厚—子麗—止……（一〇世孫）量……（一〇世孫）洪（奔燕 宋司城 後入楚 後漢渤海太守）

しかし、春秋に、諸侯の結盟に活躍しながら、すでに高傒、あるいは斉高子とあるので、その功績によって高姓をえたというのを疑うまでもなく、[9] 高氏の源流がここにあると証明する資料は、まったくない。

新唐書宰相世系表は、傒から後漢の洪にくだってきたが、その洪について、

洪、後漢渤海太守、因居渤海蓨県。

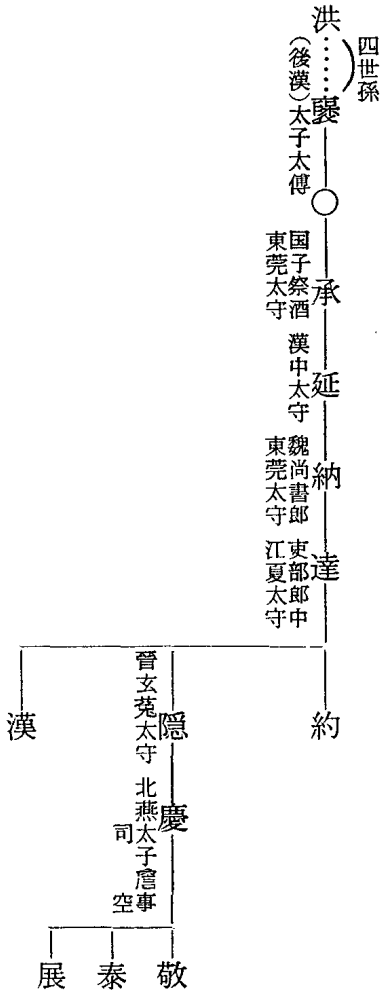
と、後漢代の洪になって、渤海高氏が成立したことを伝えるのである。以来、高氏は、この地に定住し、ここを本籍地とするにいたった、というのであろうが、この洪も、正史などから、なんらの確証もえられない。

しかも、のちに述べるように、渤海高氏は、厳密には、晋代まで確認できないので、いま、かりにこの説をとって、新唐書宰相世系表によるかぎりで、この本籍地成立について、ほかの各氏と、試みに比較しておこう。

魏収は、頓丘李氏の場合にみられるように、[10] 魏書において、その本籍地の認定を、とくにその居住の時期、期間か

ら、相当に厳格に行なっている。その魏収が認めた本貫の地について、新唐書宰相世系表が居住の起源を説明しているものが、二十一氏あるが、このうち後漢以後というのは、わずか四氏にしかすぎない。これらの各氏の祖先については、渤海高氏の場合に確証がないように、すべて精密な検討を要するが、太原王氏[11]、滎陽鄭氏[12]、京兆韋氏[13]、弘農楊氏[14]などは、最初に居住したという個々の人物は信ぜられないものの、その時期については、それがほぼ妥当と考えられている。そのほかの各氏の検討の結果をも待たねば判定しかねるが、渤海高氏の成立は、魏収の本籍地認定の範囲では、きわめて遅いものに属する、と示唆されるであろう。

さらに、新唐書宰相世系表は、後漢代から晉代までの高氏の世系を、つぎのように示している。




そして、このうち、まがりなりにも正史などにその名を見いだせるのは、襃と隱だけである。しかも、襃は信じが

たく、渤海高氏は、実に、晉代の隠になって、はじめてその存在を示すのである。すなわち、渤海高氏は、いわゆる門閥の形成期の漢、魏、晉の時代に、官界において活躍したとは、どうにも認めかねるのである。

襃については、魏書巻三十二高湖伝に、

漢太傅襃之後。

とあるもの[15]が、あるいは同一人をさすものと考えられよう。太傅高襃の任免が後漢書本紀にみえず、その伝もないから、これは魏収の作為であろうが、太子太傅高襃のほうも確認するにはいたらない。

ところで、宋代の隸釈、宝刻叢編は、天下碑録、訪碑録によって、漢執金吾高襃碑が、京畿の雍丘県南五十里の大善郷墓下にあった、と伝えている[16]。執金吾と太子太傅とは、官位はほぼおなじいが、むろん職務が異なる。また、この附近には、漢太尉高峻碑もあった、という。

この地は、河南省杞県南、すなわち陳留圉城である。陳留圉城の高氏は、引きつづいてつぎの時代にも活躍し、三国志魏志、晉書などに伝を列ねている[17]。とくに、魏の高柔は司空、司徒、太尉にのぼった。

しかし、陳留高氏の系統は、南北朝時代からが辿れず、この時代に沈黙の渤海高氏との関係も明らかにはされないのである。したがって、太傅高襃、太子太傅高襃、執金吾高襃のいずれについても、それ以上には考えるすべがない。

隠の名は、晉書巻百八慕容廆載記附高瞻載記に、瞻の叔父として、北斉書巻一神武紀（北史巻六斉本紀上）に、高歓の六世の祖で晉の玄菟太守としてあらわれる。北斉の武平四年に死んだ高僧護の墓誌にも、七廟玄菟府君八世孫、とあるから[18]、僧護が隠や歓の一門であるというのは明らかな詐称であるが[19]、そして、歓が隠の六世の孫であることも疑わしいが、隠が、晉の永嘉の初年ころに玄菟太守であったことは、事実とみてよかろう。ここに、ようやく、渤海

高氏の系図が確認されはじめるのである。

隠についての記事は乏しいが、このころの高氏一門の動向は、この高瞻載記からうかがうことである。

瞻は、晉の光熙中（三〇六）に尚書郎に補せられたが、永嘉の乱に郷里に帰り、さらに戦乱が山東の地に及ぶのを避けようと、父老と討議した。その結果が、

乃、与叔父隠、率数千家、北徙幽州。

となったものである。このあと、平州刺史の崔毖に従って遼東に行き、大興元年（三一八）、慕容廆に降った。慕容廆は、賓礼をもって待し、瞻を将軍に署せんとして、病気を理由に固辞されると、その胸を撫でながら、

君之疾在此、不在余也。今、天子播越、四海分崩、蒼生紛擾、莫知所係。孤思、与諸君、匡復帝室、翦鯨豕于二京、迎天子於呉会、廓清八表、侔勲古烈、此、孤之願也。君中州之大族、冠冕之余。宜痛心疾首、枕戈待旦、奈何以華夷之異、有懐介然。且大禹出于西羌、文王生于東夷、但問志略何如耳、豈以殊俗、不可降心乎。

と、懇請している。瞻は、結局、断りつづけ、しかも憂憤のうちに死んだが、渤海高氏がこの地方の豪族であることは、ここにどうやら明らかにされた。

おなじころ、顧、撫の兄弟は、隠、瞻らとの関係に明瞭を欠くが、おそらくはこれに一歩を先んじて、渤海蓨の地を離れ、高句麗に避難したものであろう（魏書巻七七高崇伝）。

以来、河北には五胡の諸国が興亡し、渤海も、五世紀のはじめに北魏の支配に帰するまで、慕容氏の前燕、後燕、さらには南燕の治下におかれた。高氏も、これら夷狄の王朝に協力し、仕官したものも少くあるまい。

前燕では、開、商の兄弟がいて、開は、慕容恪の参軍として、鮮卑の冉閔を討って戦死し、商は、范陽太守、遼西

太守を歴任している。[20]

後燕に仕えたのは隠の子、孫、曾孫と伝えられるもので、魏書の高湖伝、高允伝（巻四八）からその名を拾えるが、いま、湖の系統の真偽を不問にすると、

慶　慕容垂　司空　（高湖伝）
泰　〃　吏部尚書　（〃　）
湖　〃　散騎常侍　（〃　）
恆　〃　鉅鹿太守　（〃　）
韜　〃　太尉従事中郎（高允伝）
展　慕容宝　黄門郎　（高祐伝）

と、相当に重用されたことになっているが、官職だけで、事蹟は、ほとんど伝えられていない。

別に、軌は、泰の孫にあたるが、南燕の慕容徳に従って、東南の青州に徙り、北海の劇県に移住していった（魏書巻六八高聡伝）。

そして、まず、湖以下の四人とかれらに率いられた一門は、後燕が参合陂に北魏の軍に敗れ（北魏登国一〇年・三九五）、中山を陥れられる（皇始二年・三九七）と、あいついで北魏に投じた。高句麗に逃れた顧、撫の子孫の帰国は、それから半世紀以上も遅れて、献文朝のはじめごろ（四六六～）になる。軌の一族は、南燕から宋の配下に移って活躍していたが、そののちまもなく、東陽に北魏の軍に攻めこまれて捕えられ、北辺に徙されたのであった。

このように、おもに新唐書宰相世系表によって、北魏以前の渤海高氏の系譜を辿ると、正史などにこれを傍証するものがほとんどなく、きわめて不明確といわざるをえない。春秋の高氏の起源の伝説はともかく、後漢の渤海太守の洪にはじまるという渤海高氏の起源説も、さらにはまた、魏、晉の時代の家系も、四世紀初頭に隠があらわれるまでは、まったく確認できないのである。隠とその甥の瞻にいたって、ようやく地方豪族の性格の一端がうかがわれるものの、したがって、この渤海高氏は、魏晉の貴族とは認めがたいのである。

この一門が正史に登場するのは、まず魏書であるが、魏書は、北斉の制覇とともに編纂されて、湖の曾孫に北斉の高祖の歓が生まれたといい、すこぶる疑問視されていることは、のちに述べるとおりである。

## 三

渤海高氏の伝は、魏書には、巻三十二高湖、巻四十八高允、巻五十七高祐、巻六十八高聡、巻七十七高崇、巻八十九酷吏高遵、と六箇所にある。そして、允は湖の甥、祐は允の従祖弟、聡は允の族孫、遵は允の従祖弟という関係にあり、崇だけが四世の祖から分離した、とされている。魏書は、一家について一伝をたてることを原則としているから、これははなはだしい例外といえる。(21)

そして、高湖伝が巻三十二にあることにも、注目しておく必要がある。

魏書では、一般の列伝は巻二十三からはじまるが、北魏という国家の性格から、その巻の若いところは、当然、創業期の北人の功臣、とくにその宗族が占めている。そのあいだに、漢人は、わずかに崔宏、鄧渊らの数人が交わるのみで、清河の崔宏の総理のもとに草創の諸制度の整備に貢献したひとたちか、太祖道武帝のきわめて北人化した側近(22)

かであった。

そして、巻三十二にいたって、渤海の高湖、清河の崔逞、渤海の封懿と漢人の名族だけを集めて、伝がたてられるのである。この三人は、ともに後燕からあい前後して北魏に投じ、礼遇されたのであるが、崔逞は傲慢な態度のゆえに誅せられ、封懿も、道武帝への応対が疎慢でいちどは廃せられて家に還ったほどで、とくに国家に功労を尽くしたわけではない。[23] 高湖についても、一応の官爵を列ねてはいるものの、列伝のこの位置を占めるほどの業績とてないのである。それよりも、魏書の編者の意図は、高湖が戸三千を率いて北魏に投じたというように、また崔逞の誅殺が司馬休之らの亡命に障害となり、道武帝が士人にたいして寛容になったというように、その漢人豪族の帰附と協力が、草創の北魏王朝に果した力量にあるのであろう。それは、豪族としての存在を国家権力が容認したもので、そのゆえに漢人貴族の最高位に置いているものとみられる。北魏代での実際の地位はともかく、魏書の成立期に、魏収がそう評価しているのである。

これによって、高氏一門の地位が定められ、高允以下は、それぞれの活躍の時代に応じて、伝をたてられている。巻四十八の高允は、巻四十七の盧玄、巻四十九の李霊、崔綽[24]とともに、太武帝の神䴥四年（四三一）九月壬申の詔勅をもって徴せられた。

頃、逆命縦逸、方夏未寧、戎車屢駕、不遑休息。今、二寇摧殄、士馬無為、方将偃武修文、遵太平之化、理廃職、挙逸民、抜起幽窮、延登儁乂。……訪諸有司、咸称「范陽盧玄、博陵崔綽、趙郡李霊、河間邢頴、勃海高允、広平游雅、太原張偉等、皆賢儁之胄、冠冕州邦。」……易曰「我有好爵、吾与爾縻之。」如玄之、比隠跡衡門、不耀名誉者、尽勑州郡、以礼発遣。（魏書巻四上太武帝紀上）

とあるものである。この結果、州郡の遣わしいたるところのもの数百人、みな差次して叙用した、というが、とくに賢儁の胄と指名された七人は、崔綽が母の老いたるをもって固辞したのを除いて、出仕してただちに中書博士を拝した。[25]

魏書巻四十七、八、九の三巻の構成は、このうちの崔綽を含めた四人の伝からなっているので、周一良氏の指摘[26]のように、この任用にもとずいている。しかし、崔綽が、これに応じないまま、郡の功曹におわったのにたいして、游雅、邢頴、張偉の三人は、任用の意義からいえば、崔綽と同等であり、官位と事蹟については、崔綽をしのぐことになったが、その伝は、それぞれ巻五十四、六十五、八十二と散在し、しかも、邢頴は孫の邢巒伝に、張偉は儒林伝に含められている。したがって、この三巻の編成は、神麚四年の徴士にかこつけて、盧、高、李、崔をここに配するのが目的で、游、邢、張は、やはり名族ではあるが、それと意識的に区別されているのであろう。そのあいだの事情は、さらに、游雅伝の、

（高）允、将婚于邢氏。雅、勧允娶于其族。允、不従。雅、曰「人貴河間邢、不勝広平游。……」

にもうかがえるようである。これによって、高允は、伝が独立し、文人貴族としての評価を加えられたものとみてよかろう。高允の業績については、後述にゆずる。

高祐の伝は、巻五十七にある。高祖孝文帝の時代に、秘書令となり、その学識によって、行政上の諸政策を献言して、しばしば採用された。宋王の劉昶の傅から、晩年には宗正卿をつとめている。しかし、高允の歿後、十二年であとを追っているから、活躍の時期はそれほどずれているわけではない。ただ、この系統から、高歓の覇業の功労者の高乾がでていることは、記憶しておいてよかろう。

巻六十八の高聡は、本渤海蓨人、と、魏収にその本貫をとりけされているが、高允を族祖とするから、一門であることは明らかである。聡の曾祖の軌の代に、南燕の慕容徳にしたがって、青州に徙り、北海の劇県に住んで、引きつづいて宋に仕えた。聡は、皇興三年（四六九）、東陽で北魏の軍に捕えられ、平城に連れられて平斉戸となし、さらに雲中の兵戸に配された。允は、これに同情し、その文才をみこんで、中央に官を求めてやったが、若い宣武帝の側近に媚附し、栄誉を望んで、しばしば弾劾された。渤海高氏から除かれたのは、そのような履歴によるのであろうが、また、そのことが、専伝をもつことにもなったのであろう。

巻七十七に高崇伝があるが、この一家は、いままでの一門とやや疎くて、隠の以前の代から分れている。ながく高句麗にあって、北魏への帰化も、顕祖献文帝の初年に遅れた。しかも、もと北涼王の沮渠氏と婚を通じ、これを継いだものもいるし、また、北魏末には、なかなか活発に行動するものもでている。

高遵の一家は、允の伝に含まれているが、遵は、賤出の子で、貪虐をきわめたために、誅せられ、かつ、酷吏伝にいれられた。その酷吏伝は、いまはなく、北史から補われている。

魏書列伝の渤海高氏の六伝を概観すると、以上のごとくである。原則をやぶってまでそれぞれに伝をたてる必要があったか、高湖伝の位置など、問題はあろう。以下、その個々の場合の検討に移る。

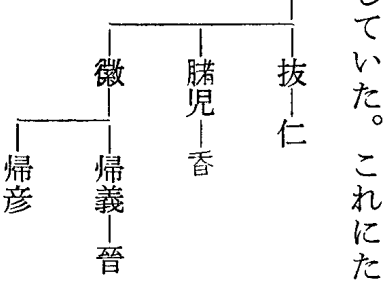
## 四

高湖伝が魏書巻三十二に占める位置には、このように注目すべきものがある。そして、湖についで、第三子の謐、さらに、その長子の樹生の名が列なる。樹生の長子が、すなわち、北斉の高祖、献武王の高歓であるからである。魏

書がその北斉の初頭に編まれたことは、あらためてことわるまでもない。

ところが、この湖から歓への系統、つまり北斉王室の高氏の系統は渤海高氏ではない、と断じ、歓が、その制覇の功労者の乾兄弟の了解をえて、北魏末の太昌元年（五三二）九月すぎに、曾祖父の湖を韜の弟と、つまり允の叔父と詐り、その一門になりすました、と論ぜられたのが、浜口重国氏の、高斉出自考—高歓の制覇と河北の豪族高乾兄弟の活躍、である。浜口氏の所論は、つぎのごとくである。

渤海高氏の一族は、允をはじめとして、いずれも学術文才をもって朝に仕えた文官で、中原の豪族として高い教養を誇りとしていた。これにたいし、湖の系統は、ほとんどが、辺境の軍鎮の武官である。とくに、




ことから、つまり湖の孫の三兄弟が河州に在貫したと認められるところから、遡って、すくなくとも湖の代から河州に在住していたものと考えられる。すなわち、湖の系統は、北魏一代を通じて。西辺の河州にいたもので、渤海蓨の高氏とは関係がない。したがって、歓が覇権を握っても、血縁のない允には追崇もせず、また、湖の一門には、鮮卑風、蕃風の名が多いのである。謚、樹生、歓の三代が懐朔鎮に徙居していたことも、まぎれもない事実である。実権を掌握した歓が、それを詐って渤海高氏を称したのは、門閥重視の当時の風潮と、歓の独立に際しての乾兄弟との提

携とによる。歓が、なお爾朱氏のもとにあって、河北平野に進出し、普泰元年（五三一）、冀州に、反爾朱氏の漢人豪族の軍とあいたいしようとしたとき、そのなかから滏口の歓の陣に密行してきて、提携を説いたのが、乾であった。歓は、これに従って、また、献身的な協力をえて、渤海の封、趙郡の李、鉅鹿の魏、清河、博陵の崔、范陽の盧らの反爾朱氏運動の漢人の有力者と結び、爾朱氏の門から自立して、これに叛き、以後、神速というごとくに覇権を獲得したのである。そして、おそらくは、このあいだに乾兄弟の了解をえて、統治上の必要から、同姓の渤海の豪族の高氏を自称し、系図上は、曾祖の湖を韜の弟にもっていったのであろう。その時期は、太昌元年（五三二）九月癸丑の前廃帝の子の渤海王の子恕の沛郡王への改封と、おなじころの歓の父の樹生への渤海王、母の韓氏への渤海国太妃の追贈の前後、すなわち、歓の洛陽入城と孝武帝擁立、太昌改元のころにほかなるまい。と。

つまり、湖の系統は、その伝の冒頭にいうような渤海蓨の人ではなく、また、慶の孫、泰の子、そして韜の弟でもない、まったく別の一族なのである。湖の伝の記事には、多少の曲筆もあるが、そのなかの系譜は、この部分を除けば、だいたいにおいて正しかろう[27]から、二つの無縁の系図が、ここで結びつけられたのであった。

そして、湖の系統は、渤海高氏の一門でないばかりか、漢人であることも疑わしいとされた。歓が鮮卑系であるらしいことは、かねてから指摘されていたが、姚薇元氏は、これより一歩を進めて、この高氏は、魏書巻百十三官氏志の是樓氏である、と断定される[28]。

前燕、後燕の慕容氏の配下では、鮮卑系と高句麗系の高姓のものが相当に活躍したらしい[29]。湖が、代東の諸部を総括し、のち涼州鎮都大将となって姑蔵に鎮し、引きつづいて子孫が河州に在住し、また、歓の一家がながく懐朔鎮にいたのなら、あるいは鮮卑の是樓氏であったかもしれない。歓の祖父の謐の妻は、北魏の宗族の叔孫氏、すなわち乙

旃氏であり、父の樹生の妻の韓氏は、魏書官氏志の出大汗氏、すなわち姚氏のいう破六韓氏で、匈奴の単于の後裔であろう[30]し、歓も、妻の婁氏、すなわち匹樓氏の財力の恩恵を蒙ったから[31]、いずれも有力な鮮卑族と婚を通じているごとくである。湖の残りの二子も、各抜は広昌鎮の将で死に、その子の猛虎は鄯善鎮の録事をつとめ[32]、また、稚は薄骨律鎮の将から営州刺史、その子の陁は沃野鎮の長と、みな辺境を守るばかりである。むろん、渤海蓨に墓所をもつわけでなく[33]、この地との関係は、なんら認められない。

この高氏が渤海蓨の高氏に附会するにいたるには、三つの段階が考えられよう。浜口氏が説かれたように、歓と乾兄弟との提携と密約、北魏末の太昌年間の公称、そして魏書での宣言である。

歓は、普泰元年（五三一）、河北に進出して、漢人の豪族の連合軍とあいまみえようとしたときは、爾朱氏の門下の一武将であった。しかし、爾朱栄はすでに孝荘帝に暗殺されて、後継の兆は叔父ほどに傑出せず、歓は自立の野心を固めていた。一方、敵対するのは、まず冀州城の渤海の封、高の軍であるが、趙郡の李、鉅鹿の魏、清河、博陵の崔、范陽の盧などの有力な豪族が、郷党を糾合して決起し、たがいに連携している。したがって、当面の軍事の面から、またそれ以上に将来の政治支配の面から、歓は、この作戦を熟慮したことであろう。しかも、乾の兄弟は、かねてから孝荘帝と親しく、その爾朱栄誅殺の挙に感じ、父の激励にうながされて立ち、ただちに范陽に馳せて、孝荘帝の信頼と期待とに感泣し、いま、爾朱氏の弑逆にさらに決意しているのである。そして、さしあたって、乾らの冀州城の戦力は、歓の軍には及ぶべくもない。これと提携して将来に備え、かつ、その自立を明らかな反爾朱、義兵として、名分をたてようと、おそらくは歓から働きかけが行なわれた情勢であろう。それが、乾のわずか十数騎による滏口の敵陣への訪問となり、予期したように妥協が成立し、局面を一転させたのである。

神武（歓）大笑曰、「吾事諧矣。」遂、与乾、同張而寝、呼乾為叔父。乾、旦日、受命、而去。（北史巻三一高允伝附高乾伝）

とあるのが、その結末であり、かつ、渤海の高歓の発端であろう。歓と乾とが同族であることが、このとき、有利というより、さらに必要な条件に近かったともいえる。これをきっかけに、歓は、河北の諸豪族と戦わずして提携し、とくに一族となった乾兄弟の非常な協力を得るのである。そのなかの魏蘭根は、魏収の族叔で、ときに魏収は洛陽の節閔帝のもとにいたが、郷里はあげて歓に附いたのであった。

このようなわけで、歓は、渤海高氏であると唱えはじめたのであろうが、それを公称したのは、太昌年間（五三二）の歓への渤海王封爵にはじまると、浜口氏が考証されたとおりである。

以来、歓と澄、洋の父子は、北斉の帝位に即くまで、渤海王を拝するのであるが、封爵なら、かつて高句麗系の高肇が、やはり渤海蓨の人を称して、渤海公を賜わったこともある。[34] しかし、洋、すなわち北斉の顕祖文宣帝は、その建国の直後、魏書に、

高湖、字大渊、渤海蓨人也。

と明記させて、それを天下に宣言した。魏収は、この意を受けて、高湖伝を高氏のうちの最初に置き、系図のうえの操作を行なって、

漢太傅裒之後。祖慶、慕容垂司空。父泰、吏部尚書。

と正統の扱いをする。そのために、後燕での官位がたかまったうえに、裒を、実在のほどはともかくとして、太傅にまつりあげ、そうしておいて、これを清河の崔逞、渤海の封懿とともに、巻三十二という位置に配したのである。こ

れは、魏書編纂の当時の政治情勢、いいかえれば、北斉初頭の支配体制から、その必要があったわけで、その事情は、魏書成立期の政局、に述べたごとくである。

## 五

ここに、ようやく、渤海高氏の正統の登場となる。

北斉書神武紀などの隠、魏書高湖伝の慶、泰の三代は、とくに積極的な証明もしかねるが、浜口氏の説かれるように、湖から歓への北斉室の系統からは切りはなされて、ここへ連なるのであろう。

泰の子の韜まで後燕の慕容垂に仕え、韜は、太尉従事中郎で北魏に投じ、太祖道武帝のとき丞相参軍になった。少くから英朗をもって名を知られ、同郡の封懿はつねにあい敬慕した、といわれるが、郷人の崔逞の敬異するところとなったのも、その弟になりすました湖ではなくて、この韜であろう。つまり、巻三十二に配されることの可否はともかく、崔逞、封懿と比肩されるのは、渤海の高韜であるべきなのである。しかし、韜は早逝した。

子の允は、ために幼くして孤児となり、十余才で祖父の泰も歿した。出家し、還俗し、遊学して、それから官界に入ったのは、三十才もなかばを過ぎてからのようであるが、四十二才の神麚四年（四三一）、世祖太武帝に徴せられてから、実に九十八の長寿を全うした最晩年まで、高宗文成帝、顕祖献文帝、高祖孝文帝と、四代の治政の中枢にあって、公明清廉、典型的な文人官僚であった。巻四十八の高允伝が、その生涯を詳しく伝えるが、さらに、大沢陽典氏に、北魏高令公伝小攷[35]、がある。したがって、いま多くをこれらに拠りながら、その重要な諸点を指摘していこう。

まず、允の中央で活躍の時期である。神麚四年の登用は、さきにその詔勅を掲げたように、北魏が、周辺の諸民族

をほぼ平定し、内政の基礎もようやく固まったとみて、新しい中原統治の必要のために行なったものである。允は、このとき、官僚の生活に踏みだし、この施政の方針のもとに、文官として業績をあげ、文成以後の三朝ではほぼ国政を預って、孝文帝の洛陽遷都の数年前に死去した。北魏中葉の安定期であって、そのあいだ、崔浩の誅殺や文明太后の専政などの事件があって、それに関与もしたが、総じてこの時代が允の性格にふさわしく、また、その性格的な政治態度や政策が、この安定の基礎をつくったとみられるであろう。それがまた、のちに述べるように、孝文帝の中国化政策の基礎ともなったと考えられる。

允は、宰輔の任にあっても、その私生活はまったくの清貧であり、名誉にたいしても無欲であった。第一線で活躍していながら、郎たること二十七年、官を徙さず、という驚くべき事実もあり、また、文成帝があまりの清貧さに歎息して、その長子の惓を綏遠将軍、長楽太守に任じようとしても、しきりに表して固辞したほどである。そのために允が北魏随一の文官であり、その一家がそろってすぐれた才能を持って、官僚貴族層形成の条件を完備しながら、その弟、子、孫は、のちに述べるように、さして栄達せず、しかもその多くが早逝したのである。そこが、のちに、湖の系統につけこまれるところであったろう。

それでいて、允は、学識に富み、人情に厚かったから、郷里で学業を教授すれば、千余人が集まり、また、高聡ら不遇の人材には、家財を傾けてまで、その救済に力を尽くした。

ところで、允の政策には、とくにとりあげるようなものがない。神䴥四年の漢人の登用から、崔浩は、さらに進んで、はやくも姓族の分定を企図して、時期尚早と盧玄にたしなめられ、[36] あるいは、冀、定、相、幽、并の五州の士数千人を推挙し、起家してただちに郡守にして、太子の晃に非難された。崔浩のこの強引な政策が、罪を衆にえ、その

誅殺の要因になったとみられているが、[37] 允は、これによって政界に入り、国史の事件に危く連坐を免れただけに、北人治下のこの王朝において、とくに選挙の問題については、すでに崔浩を批判していたように、慎重を期し、一般の政策にも、堅実性を失わなかったものである。しかし、風俗改善の上奏にしても、郡学の制度にしても、おそらくは修史の目的、律令の議定にしても、もとづくところは中国の伝統主義であって、異民族の王朝といえども、それによってはじめて国家の安定がはかられると考えたのは、当然である。

したがって、皇位継承の問題にも、常に正統な立場を強く主張し、そのために、しばしば危機をはらみながらも、無事きりぬけられたのであった。そして、即位した若い諸帝には、事あるごとに、しかもはげしく諫めたという。

このように、允は、その政治的態度は、游雅のいう真に風節なるもので、一身の危険を顧慮せず朝廷に尽くしたが、その政策に積極性はない。このあと、孝文帝は、太和十八年（四九四）、洛陽に遷都し、一連の中国化政策を強制したが、これらはおもに、文明太后の死によってようやく親政を実現した孝文帝の独断にで、補佐の官僚もすでに高閭、李沖らであって、むろん、允の遺志によるものではなかった。

しかし、この允の思想と態度とは、孝文帝の政治哲学の根底に、強く潜在していると考えられる。その政策も、本質的には、允に連なるもので、その大きな発展である。そして、孝文帝の門閥主義賛成論[38]には、允への信頼感からの影響がきわめて濃厚とみられる。さらに解釈をひろげれば、允の予期に反して、北魏の方向を大きくきめてしまったことになろう。

允の存在は、むしろ、このような意味で、評価さるべきかと思う。

なお、高允伝には、允の子弟と、従叔の済の一家、それに族兄の毗の伝が含められてい、済の子の遵については、

別に、巻八十九酷吏伝の一部があてられている。

允の二弟の推と燮は、ともに早くから文才をもって名を知られていた。推は、太延中に游雅に推薦されて、宋の文帝に使いし、建業に客死したというが、魏書巻四上世祖太武帝紀上の太延四年（四三八）十二月に、

詔兼散騎常侍高雅、使劉義隆。

とあるのがそれであろう。一方、燮は、太武帝の徴に応じないで、譏り笑いつつ、従容として家にいたという。そして、魏書高允伝はこの二人の子、孫をまったく記載しない。

允の子と孫についても、合わせて五人の名を掲げるにすぎない。そのうち、忱と綽が、長楽太守、豫州刺史と并州刺史になり、政寛恵民、あるいは清平にして抑強扶弱のゆえに、地方官として、評判はたかかったという。しかし、この綽も、沈雅にして度量あり、博く経史に通じていたが、身長八尺の偉丈夫で、行政面では強直、豪貴をも避けなかったほかには、いたって括淡で世利を競わず、あまり中央政府で活躍しようとしていない。

推の客死は允の四十九才のときであり、忱の長楽太守任命はその二十年ののちであるから、また、綽は四十八才で死去したので、この三人は、平均寿命に近いのであろうが、允の長命にはくらぶべくもない。そして、懐、貴賓、炳は、さらに若くして死んだようである。

允は、みずからも、子についても栄誉を望まず、一家も、その気風を受けついで、地方官として地味に活躍する程度で、ほとんど出世しないでおわった。しかも、代がくだるほどに、早逝するものが多かったから、北魏の末期にはこの系統は絶えかけていて、渤海高氏は、乾の兄弟に頼るようになっていたと推測される。

允は、あまりに北魏政界の大立物であったが、しかし、このように、一門が政治支配者層を形成しようとはしなか

った。それは、すでに、魏晋の時代と、あるいは南朝と異って、とくに北朝では、社会的諸条件が、そのような官僚貴族制の存在を認めにくかったからである。しかし、北朝にも、政権からは後退しつつも、貴族的存在の舞台はあり渤海の高氏は、やはり、そこに文人貴族として踏んでいる。まず允の活躍であり、そのほかにも、つぎのようなことが挙げられるであろう。

神麚四年には、高允伝の徵士頌などによれば、允の従叔の済と允の族兄の毗も、ともに推挙されて、済はのち游撃将軍、滄水太守に、毗は、郷邑で長者と称せられていたといい、従事中郎に至っている。

ついで、宋への通好使で、高氏からは三人も派遣されている。北魏と宋との使節の交換は、宋の建国とともに行なわれていたが、北魏は、使者の人材に事欠いて、歩堆、胡覲らをくりかえし遣わしていたものの、おそらくは貴族的洗練度に劣って、適材を妙簡したとはいえなかった。それが、神麚四年ののちは、漢人の名族を抜擢したから、鄧穎、宋宣、盧玄、游雅、邢頴、張偉、宋愔と、あいついで名門から送られている。[39] そのなかで、推は、南人にその才弁を称せられたのであり、ほかに、済も国使となり、それには祐の弟の欽も同行した。[40] また、広の父というのが、文成帝の太安三年（四五七）ころ、推とおなじように客死して、帝の悼惜するところであった。[41]

学者としても、允が秀でて、ひろく経、史、天文、術数に通じ、とくに春秋公羊を好んだ。家にかえって教授したときは、わずかのあいだであったが、受業者が千余人に達したという。官に仕えては、著作郎、中書令、中書監として、太武帝の時代に編纂の国書の先帝記、今記の大半を書いたといい、文成帝、献文帝の時代の軍国の書、檄の多くも、允の文であった。文学作品は、およそ百篇にのぼり、別に集ありて世に行わる、というのについては、隋書経籍志に、後魏司空高允集二十一巻、とある。

允の子弟については、あまり特記されていないが、血筋と環境から、おのずから学究的であったろうし、済とその子弟についても、同様である。

この一家の婚姻関係も、魏書は、あまり伝えようとしていない。わずかに、允が河間の邢氏と婚を通じ[42]、允の女が渤海饒安の刁粛に嫁したとするだけである。刁粛は神䴥四年以来の同僚であり、刁粛の父の邢雍とは親友であった。

なお、酷吏伝に編入された遵については、その賤出であること、遵、妻の明氏、その家族とも貪欲なことが強調されている。その遵は、才覚はあったが、幼時から兄弟に軽侮され、父の済の喪に加わることを拒まれたという。遵の訴えを聞いて盛大な喪儀の喪主たらしめたのは、允であった。学問があり、能吏でもあったが、あまりの貪虐に死を賜わった。

このように、高氏は、允を中心に、北魏の初期から、すぐれた人材を擁していた。それは、経済的な実力を明らかにできないけれども、渤海県蓨郡に、かねてから確固たる地方豪族としての基盤を築いて、すぐれた文官を送りだしたのである。しかし、一般に中央の政界に関心が薄く、その門閥性を推進しようとしなかったのは、この時代の郡望の特殊な存在であろう。

## 六

巻五十七の祐は、允の従祖弟にあたる。したがって、おたがいの祖父の展と泰は兄弟である。允伝の済は、祐の従叔になるから、済の父も、その兄弟の一人であろう。新唐書宰相世系表に、慶の三子、展、敬、泰とあるものであるが、済の父が敬であるとはきめかねる。

展は、後燕から、道武帝の中山平定によって、北魏に投じ、代都に徙って、三都大官で死去した。

子の讜は、夏の赫連昌の平定（神䴥元年・四二八）に軍功があり、崔浩とともに著作郎、中書侍郎などをつとめた。つまり、允の従叔で、職務上でもわずかに先輩であり、あるいは同僚としても勤務したであろう。仮散騎常侍、平東将軍で死んだが、そのあいだに冀青二州中正となり、蓨県侯に封ぜられているから、この地方の望族であり、また、韜が早逝したあと、高氏の中心であったと思われる。蓨県侯は、祐の兄の東青州刺史の祚が襲爵し、中正のほうは、孝文帝の太和年間に、祐が冀州大中正に就任している。

祐は、ひろく書史に渉り、文学雑説を好み、性格も豪放であった、文成帝の末期に、中書学生からその博士侍郎となり、太和二十三年（四九九）の死去の直前まで、秘書令、持節輔国将軍、西兗州刺史などを歴任し、修史、選挙、学校、治民の問題について献策し、採用されることがしばしばであった。とくに、允が郡学の開設に努めたのにたいし、祐は、県に講学を、党に小学を立てて、その普及をはかっている。そののち、亡命の宋王劉昶の傅を勤めて、南朝の制度移入に関与し、允の政策を敷衍して、孝文帝に協力したのである。

祐の一家も、いずれも学問に秀でたが、かなり短命で、北魏末には、曾孫の徳正[44]が、ようやく頭角をあらわしはじめた程度であった。徳正は、東魏になって、若い高洋の儀同開府参軍として信任され、歓の死後、澄、洋に、あいついで受禅を勧めて、その工作に大いに暗躍したのであった。これに成功して、即日、侍中となり、吏部尚書、尚書右僕射と昇進して、尚書令の楊愔とともに新政府の運営に邁進したのが、魏書の成立期である。天保十年（五五九）、暴虐の文宣帝の洋に、同族であるはずなのに、漢人を用いて鮮卑を除けといったのが死にあたる、と、曳きだされて斬られたが、これも、その終末の象徴的な事件であった。その伝は、北斉書巻三十と北史巻三十一高允伝とにある。

北魏末期に、この系統も允の系統も人材がとだえかけていたときに、高氏の中心になったのが、祐の従弟の翼とその子の乾、慎、昻、季式の兄弟であった。[45] この親子の動向についても、さきにも触れたが、浜口氏の高斉出自考—高歓の制覇と河北の豪族高乾兄弟の活躍、とくにその（下）にくわしい。ここで指摘しておきたいのは、つぎのことである。

翼は、豪侠な性格で、郷里のひとびとの尊敬するところであった。葛栄が乱をおこすと、朝廷では、山東の豪右なるをもって、翼を渤海太守に任じ、宗族を率いてその地の防備にあたらせた。

そのころ、乾は、起家して員外散騎侍郎となり、長楽王子攸と親しかった。武泰元年（五二八）、爾朱栄が山西から洛陽を襲うと、都を去って父のもとに帰った。そして、郷党を糾合し、訓練に励んで兵力を貯え、一時は葛栄の官爵を受けて妥協しながらも、爾朱栄に擁立されて孝荘帝となった子攸に通じて、反爾朱の態度を固めていた。このあいだの一連の行動は、新しい実権者にたいして、多分に露骨な反抗であって、昻が捕われるなど、爾朱栄に制肘されるところも多かった。孝荘帝が爾朱栄を暗殺すると、兄弟は父の激励にうながされて立ち、乾はただちに洛陽に馳せて、孝荘帝の信頼と期待のことばに、昻とともに感泣するのである。

このとき以来の乾らの手兵は、漢人部隊ながらもいたって強力で、のちにしばしば歓を助けた。

爾朱一門の反撃に、孝荘帝が弑され、山東の状勢も窮迫してくると、高氏は、おなじ渤海の封氏と結んで、冀州城に先制攻撃をかけ、これを陥れた。このとき、翼が大都督に推されたが、

和郷里、我、不及封皮。（北史高允伝附高乾伝）

と辞し、いやがる封隆之を昻が脅迫して、その任にあたらせている。[46]

そのうえで、河北の各地の諸豪族の連携が成立し、歓との対決となった。しかし、歓は、乾と妥協を計り、密約を結び、渤海高氏の一員となることで、反爾朱の態度を漢人豪族に納得させ、覇業への重大な契機をつくった。

乾と昂は、かって孝荘帝に頼りとされて、感泣し、劒を抜いて起って舞い、死をもって帝の志を継ぐ、と誓ったのであったが、また、冀州城を攻略するや、まず孝荘帝のために哀を挙げ、将士みな縞素して誓ったのであったが、その忠節は、いまやまったくすりかえられて、歓に捧げられるのである。神采高明の節閔帝の廃位を、また、孝武帝の歓への異心を知ると魏の禅を受けるようにと、歓に勧めたりするのである。そして、この丞相のもとで、乾は侍中、司空に、昂も驃騎大将軍、儀同三司、冀州刺史となるのである。

孝武帝も、一方で、乾の力を利用しようと図った。歓が実権者となったいま、かねてから魏室に忠節を尽くし、漢人豪族のだきこみに懸橋となり、歓にも近いので、あえて乾の立場に嘱目したのであった。乾は、あいだにはさまれて苦悩し、父の服喪を口実に、請うて侍中を退きもしたが、両者とて放置はしない。結局、孝武帝は、利用できないと知って、乾に死を賜わった。永熙二年（五三五）、三十七才であった。追求の手は弟たちにも及んだが、慎と昂は、晉陽の歓のもとへ逃れて、危く難を免れた。

のち、昂は戦死し、慎は叛いて西魏へ逃れて、北斉の創業まで協力の続けられたのは、季式だけである。なお、慎は、乾、昂と志を異にして、冀州城攻略と父の死ののちは、行動をおなじくせず、滄州や光州に刺史として赴任し、本郷の部曲数千人を随えていって、酷政をきわめ、吏民を苦しめていた。

このような行動をみると、翼と慎の態度はあくまでも保守的であり、乾と昂は、これよりはかなり柔軟で、乱世の青年のものである。それが、貫徹できなかったものの、新しい時代の推進力となったのであり、歓がこれと戦わずし

て結んだのは、戦略上、攻略上のことながら、これら若い人材に着目してのことであろう。

## 七

巻六十八高聡伝は、その冒頭に、

高聡、字僧智、本渤海蓨人。

曾祖軌、随慕容徳、徙青州、因居北海劇県。

父法昂、劉駿車騎将軍王玄謨甥也。少随玄謨征伐、以軍功至員外郎。早卒。

聡、生而喪母、祖母王、撫育之。大軍攻剋東陽。聡、徒入平城、与蔣少游、為雲中兵戸、窘困無所不至。族祖允、視之若孫、大加賙給。

と書いている。この系統は、允と軌が従兄弟にあたり、明らかに渤海高氏に属するのに、これに限って、本貫をとりけされたのである。ここには、魏収の本貫認定の問題があるわけであるが、まず、一家の消息を尋ねておこう。

北魏は、皇始元年（三九六・晋隆安元年）、後燕の常山を、翌年、中山を攻略した。これによって、鄴、信都を除いて、およその地が北魏に帰した。韜、展ら高氏の一族も、このとき、後燕から北魏に転じたのである。

後燕の范陽王の慕容徳は、鄴を固守していたが、この情勢から、北魏の天興元年（三九八）、戸四万を率い、南の滑台に撤退して、燕王を称した。そして、その翌年には、琅邪から広固に徙り、天興三年、南燕の帝位に即いたのである（魏書巻九五徒何慕容廆伝附慕容徳伝、晋書巻一二七慕容徳載記）。

軌は、慕容徳に仕えて鄴にい、ために、一族とおなじく行動できなかったのであろう。そのまま慕容徳について、

青州に至り、北海の劇県に住むとともに、王玄謨[47]の妹と結婚した。南燕は、その嘉平三年（北魏明元帝永興二年、晋義熙六年、四一〇）、晋の将軍の劉裕に滅されたから、軌、法昂、聡と、その配下から宋に引きつがれて、南朝にあったものである。

献文帝の皇興三年（四六九）正月、東陽は、二年にわたる青州刺史沈文秀の死守も空しく、慕容白曜の軍に陥れられた。五月、青州の民は、平城に徙されて、平斉民にあてられ、あるいは奴婢として百官に分けあたえられた（魏書巻六顕祖紀、巻五〇慕容白曜伝）。聡、十八才、蔣少游と平斉戸に編入され、のち雲中に配して、辺鎮の兵士とされ（魏書巻九一術芸蔣少游伝）、困窮の極に突きおとされた。[48] 族祖の允は、これをすておけず、救済の手をさしのべ、あえて任官の道さえ開いた。允の伝に、徙人のうちに允の親戚が多かった、というから、聡は孤児とはいえ、その家族は相当に大きかったのであろう。

聡は、学問と文才が允の気に入られて、推選されて中書博士を拝し、逆境から浮かびあがった。中書侍郎への昇進には十年を要したが、太和十七年(四九三)、員外散騎常侍を兼ねて、南斉への使節に選ばれている。しかし、そのあとの行動は狡猾である。孝文帝の南伐に、志願して輔国将軍を仮せられながら、風を望んで退散し、ふたたび平州に徙して民とされた。このときも文才をもって復帰したが、若い宣武帝の親幸の趙脩、茹皓、高肇に媚附し、その一人が失脚するごとに、つぎの倖臣に諂い、とくに高肇には同族といって格別の庇護をえ、このあいだ弾劾されること三度に及んだが、かれによって免れては権力を振ったという。そののち、おそらくは肇の後任として、中書令の要任を望んで果さず、生まれ故郷の青州に刺史となって、正光元年（五二〇）に死んだ。

子に、長雲、[49] 叔山の二人がある。

この経歴は、允の一家とはだいぶ異なるものである。

後燕の滅亡期に、渤海高氏の主流は、北魏に投じて、その創業に大いに協力したのに、軌は、おなじ後燕でも慕容徳の配下にあったために、その南燕の建国に参加し、北魏への帰国が遅れた。そのあいだ七十年、おもに青州北海郡劇県に居住し、南燕、東晋、宋の三代に属した。そして、北魏へは、聡が、捕虜として強制移住させられたもので、平城西北の平斉戸や、雲中の兵戸に編入された。

たまたま、允が元老格であったために、とくにその恩情をえたものの、任官後の聡の政治態度は、允の公明清廉なのとは対蹠的に、卑屈狡猾で、その死後は、こんどは高肇に同族として恩寵をえている。

しかし、聡が、その本貫に、本、の一字を冠せられたのは、やはり、渤海蓨の故郷を棄てたからであろう。聡は、平斉戸、雲中の兵戸から、おもに京師で官にあり、従軍や并州刺史の赴任、平州への放遂などもあったが、

乃、因（茹）皓、啓請青州鎮下治中公廨以為私宅、又、乞水田数十頃。皆、被遂許。

とあるから、最後に青州刺史にもなっているが、茹皓の誅戮（正始元年・五〇四）の前から、青州のおそらくは東陽に家を構えたのであろう。ただ、高肇は、のちに述べるように、渤海高氏に附会し、ことさらに蓨県の南に墳墓を築いているし、はじめ平城に移徙された一族、つまり多数の允の姻媾が、聡が任官したあと、許されて帰郷しなかったか、また、聡が、なぜ孝文帝の時代にいながら、渤海蓨との関係を絶ったのかに、なお疑問は残る。

本貫取りけしの例は、魏書には、なおいくつかある。魏収の本貫認定の資料になるのであわせみておこう。

聡に似た経過を辿って、冀州の平原の本籍に、本、の字を冠せられたのが、劉休賓（巻四三）である。祖の昶が、

慕容徳に随行して南燕に参加し、北海の都昌県に移り住んで、父の奉伯は宋の北海太守になっている。休賓の妻子は太平真君十一年（四五〇）に北魏に移ったが、休賓は、皇興三年（四六八）まで、梁鄒の守将として抵抗し、ついに降った。平斉郡の懐寧県は、梁鄒の民で構成したので、ここの県令に任命され、四年ののち、おそらくは県令のまま死去した。したがって、すくなくとも休賓の生存中は、平原との関係は絶えたままであったろう。その子らも、太和中に、従兄の南叛に坐して北辺に徙され、のち代に帰り、あるいは地方にでて歴官したが、郷里への居住は確かめられない。

高聡、劉休賓とおなじように、ながく南朝にあり、斉、青で捕虜となったが、旧地へ復帰したものもいる。

傅永（巻七〇）は、清河の人、かつて青州から北魏に投じたが、ふたたび南奔していたのを攻略され、やはり平斉戸に編入された。この地で飢寒の十数年を過し、官途について、貝丘県開国男に封ぜられ、食邑二百戸を賜わりもして、熙平元年（五一六）、八十三才で死去し、その封地へ葬られている。この埋葬について、挿話がある。永は、生前、北邙山に登り、杜預、李冲、王粛らの墓地を眺めて、自分もそこにと願い、土地を買って子の叔偉に言いのこしていた。叔偉は、代都でできた妾腹の子で、この遺言を実行しようとした。本妻の賈氏は、本郷にい、男子がなく、のち上京したが、たまたま妾の馮氏も死んでいたので、合葬されるかと疑い、霊太后に訴えでて、ついに封地の斉州の東清河へ葬った。というのである。しかし、後述の傅豎眼と違って、本郷の司州の清河との関係を断つことなく、これを確保している。

張烈（巻七六）は、清河東武城の人、やはり南燕の建国に参加して、斉郡の臨淄に移りすんだ。帰国は、遅れて平

城時代の孝文朝である。宣武帝の即位とともに、先勲を追録されて、清河県開国子、邑二百戸に封ぜられ、老母を養うために十数年も郷里で過し、晩年にも帰郷して、兄弟が同居して和やかに、親類から敬慕されたという。

このように、南燕に属したりして帰国が遅れ、また、その降伏の際に頑強に抵抗しても、明らかに郷里との関係を保っていれば、当然のことながら、本、の字を冠せられることはない。つぎの成淹は、僑居の期間もながく、その関係が明確ではないが、それを回復したものと考えられよう。

成淹（巻七九）は、上谷居庸の人、晋の侍中の粲の六世の孫で、晋の東遷に随行し、祖の昇から北海に住んだ、という。宋に仕え、淹は、員外郎であったが、苦戦の東陽、歴城へ救援に赴いて、捕虜になった。平斉戸へは編入されなかったらしい。王肅との問答などからは、郷里と断絶はしなかったように窺える。

そこで、範囲を拡げて、北魏への帰順の時期、僑居の期間などの異なる例をみておこう。

賈彝（巻三三）については、

賈彝、字彦倫、本武威姑蔵人也。六世祖敷、魏幽州刺史、広川都亭侯。子孫、因家焉。

とある。父は前秦の苻堅に仕え、彝は、後燕から、その参合陂の大敗に北魏に捕えられたが、道武帝は、かねてその名声を尊んでいたので、重用して国政に参預させた。のち、後秦や夏に捕えられ、夏の中書監で歿し、北魏が夏を破るに及んで、その尸柩を迎えて、代南に葬った。三国時代に、甘粛から河北に移住し、旧地を失ったのはともかく、新たな本籍も認められない例である。

本東平寿張人、の呂羅漢（巻五一）は、後趙の石勒の配下にあったときに、祖先が幽州に移っている。北魏へは、

後燕の河間太守の祖父の顕が、郡をあげて降ったものであり、温、羅漢の父子は、おもに地方官を歴任していた。

程駿の伝（巻六〇）にも、本広平曲安の人なり、とある。その六世の祖の良が、涼州に流罪になり、駿にいたるまで、後涼、北涼に属し、太延五年（四三九）の太武帝の平涼で、ようやく平城に遷って、ほとんど京官をつとめている。

朱元旭の伝（巻七十二）には、

朱元旭、字君旭、本楽陵人也。祖覇、真君末、南叛、投劉義隆。遂居青州之楽陵。

とある。太平真君末（四五〇）に、滄州の楽陵から宋に逃れ、北魏の山東攻略ののちも、青州の楽陵に居住したのである。したがって、正光以後（五二〇～）の本州中正というのも、青州中正の意であろう。しきりに高句麗に使いして、東方経営にも従事したが、晩年の五年間は新設の義州刺史になって、武定三年（五四五）六十七才で死んでいる。

晉室の司馬氏の亡命の一派も、同様に扱われている（巻三七司馬休之伝）が、その理由は判断しがたい。そのなかで、楚之は諸帝の金陵に陪葬されているが、永平（四年・五一一）、延昌、正光にくだると、子孫は、明らかに河内の温城の西北の郷墳に葬られている。(50)

なお、宋室の劉昶（巻五九）、斉室の蕭宝夤（巻五九）については、その王室との関係が書かれているだけである。

ほかに、本、の例には、傅豎眼、淳于誕、李修などがいて、それぞれ郷里との関係を絶ったものと思われるが、明確にはわからない。

傅豎眼（巻七〇）は、本清河人、で、傅永と同族ではあろう。後趙から南渡し、磐陽で郷閭の重んずるところとな

っていた。霊根、霊越の兄弟が、いちど文成朝に亡命し、南奔して建康に行って、霊越は晋安王子勛の自立などの宋の内紛に加わって殺された。その子が竪眼で、のち北魏に入り、ほとんどその対南策に従事していたようである。なお、長子の敬和は、家に卒す、とある。

淳于誕伝（巻七十一）には、

其先太山傅人。後、世居於蜀漢、或家安国之桓陵県。

とあり、誕も、蕭賾の益州刺史などをつとめて、おもに四川の方面にい、景明中に漢中から投じてきた。ために、北魏でもこの方面の経略を命ぜられている。

李修（巻九一術芸）は、もと陽平館陶の人であったが、父が医術の習得に宋の彭城の沙門僧坦を尋ね、修の兄弟が帰国して平城に赴き、高允も診断した。

この三例は、旧郷との関係を明らかにできないが、すくなくとも当人らは離郷したことを示したのであろう。

そのほかにも、南朝から北魏に転じたものは少なくなく、その大半は本貫を回復しているが、その地との関係については明確を欠く。

たとえば、琅邪の王肅（巻六三）で、太和十七年に来奔して孝文帝に重用され、北邙の覆舟山に杜預と李冲と近接して葬られた。

劉藻（巻七〇）は、天安中（四五五～九）に義兄の李嶷と招かれたが[51]、北地の諸羌の経営に尽力して、ほとんど甘粛方面にいた。

巻七十一の、裴叔業、夏侯道遷、李元護、房法友、王世弼、江悦之は、いずれも南斉から孝文末、宣武初に入朝し、封爵をえている。そのなかで、李元護は、景明初年に斉州刺史になって、僑居時代の旧墓、故宅を訪れ、村老たちをもてなして、大いに悦ばれたというから、むしろ、南の地との関係が薄くなっていたのであろう。

以上、明確な結論は引きだしがたいが、魏収の本貫認定の態度はかなりきびしいことが窺われる。それは、魏書成立期の政情から、高聡、賈彝など各地の郡望と関係の深いものにとくに著しく、薛氏が、後漢末から二世だけ蜀にいてついに河東汾陰の郡姓に入れられなかったこと（巻四二薛辯伝）などとあわせて、さらに厳密に考える必要がある。

## 八

巻七十七高崇伝には、渤海蓨人、と明記されているが、これは、聡と対照的である。

先にも触れたが、崇の四世の祖の撫は、晉の永嘉中に、兄の顧と高句麗に避難した、という。その曾孫の潛が帰国したのは、顕祖初（四六六）とあるから、聡の捕えられる直前で、実に一五〇年もの空白がある。しかも、遼東に住み、それがかなり続いたらしく、崇をおいて孫の恭之の伝に、自云、遼東人也、とある（北史巻五〇）。また、献文帝は沮渠牧犍、すなわちかつての北涼の哀王の女を武威公主とし[52]、潛に妻あわせている。すでに、周辺の諸民族平定の時代は過ぎていたが、その宗族などの処遇に準じている。沮渠氏は、太平真君八年（四四七）族誅されたので、公主は、その血統の絶えるのを惜しんで、子の崇に継がせて沮渠姓をなのらせ、崇が本姓に戻ったのちは、その子の謹之を継嗣としてもいる[53]。これらに加えて、高肇が、撫の兄の顧の五世の孫を自称しているというので、姚薇元氏は、

崇の一族も高麗人である、とされるが、[54] むしろ、魏収が、崇の伝に、とくに、撫は兄の顧とともに、と兄の名も挙げて、渤海高氏には高句麗に逃れた一派もあることを明らかにし、かつ、肇との区別をはかったもの、とみるべきであろう。

北魏に帰して以来、すでにその末期であるが、このように優遇されて、この一家は、資産にも大いに富み、僮僕千余人を擁して、また倹素であった。みな、学問に励み、文才に秀で、名流の儁士とでなければ交際しなかったといわれる。[55] 政治的態度も、地方長官や御史として、清断にして権豪を恐れず、ために、謙之、恭之は、非業の死をとげている。したがって、婚姻の対象も名流に限られたであろうが、いまは崇の後妻の李氏、謙之の妻の中山張氏が知られるのみで、ともに明識な婦人であったという。

このあいだ、渤海蓨の地との関係は定かでないが、恭之は、孝荘帝に近く、乾とともに事に当ったであろうし、その子の士鏡は慎の離叛に協力し、また、謙之の子の緒は、封隆之の冀州儀同府で活躍しているから、最末期には、そのつながりが強いとみられる。とくにその積極的な根拠はないが、湖や肇のように附会を要する理由もなく、その渤海高氏の一門たるを疑うまでもあるまい。

## 九

すでにいくども触れてきたように、肇は、渤海高氏の一族ではない。魏書巻八十三外戚伝、巻十三皇后伝は、ともに散佚したが、北史巻八十外戚高肇伝、北史十三后妃孝文昭皇后高氏、宣武皇后高氏伝から窺えば、そのあいだの事情はつぎのごとくである。

肇は、みずからいうところでは、もと、渤海蓨の人で、五世の祖の顧が、永嘉の乱を高句麗に避けたのである。北魏に入国したのは、孝文帝の初年（四七一）で、前節の潜に遅れること五年、颺、乗信の兄弟が、多数の郷人を引きつれてき、将軍職、爵を拝し、客礼をもって待し、奴婢、牛馬、綵帛を賜わるなど、大いに好遇された。

そして、颺の女、つまり肇の妹が孝文帝の宮中に納れられ、その子の宣武帝が即位するに及んで、[56] 外戚として、肇は権勢を振うのである。おなじく孝文帝と文昭皇后との子の長楽公主には、肇の兄の琨の子の猛が尚し、やはり肇の兄の偃の女が、宣武帝の貴人からのち皇后となり、肇も宣武帝の姑の高平公主に尚して、王室との強固な関係が打ちたてられる。

肇は、能史であったが、さらに自己の地位を確立するために、手段を選ばない。宣武帝の順皇后の暴死も、高貴嬪をたてるための肇の策謀という世評であったし、皇子昌の死も同様であろう。諸王は囚禁されたにひとしく、多く寃罪に陥れられ、咸陽王禧、北海王詳、彭城王勰、京北王愉らが殺された。清河王懌のことばに、

天子兄弟、詎有幾人。而炎炎不息。昔、王莽、頭禿、亦、藉渭陽之資、遂簒漢室。今、君曲形見矣。恐復終成乱階。（北史巻一九清河王懌伝）

とある。勲人も、封秩を削減するなどして抑圧し、これに背くものを讒訴して陥れた。

このようにして尚書令、司徒にのぼり、宣武朝の政権を掌握したが、もとより学識がなく、しばしば、礼度に違い、孝文朝の制度を改めたので、大いにひとびとの憤懣をかった。そして、宣武帝の死去により、征蜀の軍を返してきて、ついに宮中で殺された（延昌四年・五一五）。

肇は、高句麗から移住して、宣武朝に権勢をえたが、孝文帝の貴族政治ののちだけに、寒人として貴族階層から軽

侮された。それがこのような悪辣な手段をとらせたが、同時に、一方では渤海高氏への附会をはかったのである。

宣武帝の即位とともに、鬷が渤海公を追贈された。さきの聡が、趙脩に連坐し、肇の宗人ということでひとり免れたのが、その三年ののちである。そして、世間の嘲笑をかいながら、詔勅をえて、延昌三年（五一四）、ようやく墓地を郷里に改めたが、これが渤海蓨県の東南部のようである。清の嘉慶十一年に、山東界内の徳州衛河第三屯の東岸から、著名な高貞碑が出土し[57]、康熙年間、その十二年以後に、おなじく第六屯の河岸から高植墓誌が発見された[58]。貞はその延昌三年に死去し、碑は正光四年（五二三）に建てられたものである。湛の墓誌も、乾隆十四年（一七四九）、この第三屯から出たといわれ、故郷の司徒公之塋に葬った、と書かれているから[59]、父の肇の墓も、この故郷にあったのである。山東省徳県は、天津市管内の景県から、大運河を隔てた東南岸にある。

渤海高氏への附会の努力は、このように、遅くとも宣武朝の初頭から、東魏にいたるまで、おそらくは北斉まで行なわれたのであるが、魏収には、はっきり否定された。姚氏は、肇の一家が高麗人であるとの立証に、肇が夷土から出て親族がなかったということ、弟の顕の高麗国大中というのは、高麗の大兄という官職であること、をあげられる[60]。肇や文昭皇后の母は蓋氏であり、これも姚氏の説かれるように、太武朝に陝西の杏城に反した盧水胡の蓋呉の族、羯族の蓋樓氏であろう[61]。また、太和のはじめころ、孝文帝の目にとまったのは、熱河の龍城鎮であった。肇の兄弟四男三女は、みな東裔に生まれた、とあるのは、これらの理由で、前節の崇と異なり、渤海高氏でないばかりか、異民族の出身であることを強調したものであろう。

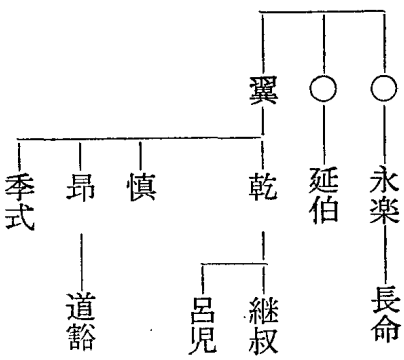
一方、北斉になると、別に渤海高氏を詐称するものがでている。前掲の高僧護墓誌[62]で、善無の人、もと秀容の酋長、市貴[63]の孫、阿那肱[64]の子にあたる。市貴は、歓の覇業に軍功があり、阿那肱は、北斉末期にもっとも権勢を振った。僧

護は、その父の全盛の武平四年（五七三）に幼死している。これは、しかし、渤海高氏にというより、北斉王室への附会をはかったものである。

## 十

北魏の東西魏への分裂期の乾の兄弟の活躍と、北斉受禅への徳正の功績は、すでに述べた。しかし、それを除くと、北魏ののち、高氏の一門は、ほとんど史籍にその名をとどめていない。

乾の兄弟では、四男の季式が、慎が西魏へ逃れたあとも、歓の知遇をえて侍中、冀州大中正などを歴任し、北斉まで存命したが、歓の死後は不遇であった。北斉の天保初年に南征し、私的に交易して罰せられ、赦されたが、四年には死去している。ときに三十四才で、その子についての記載はない。なお、長兄の乾の継叔、呂児の二子が祖父と父の爵を襲い、三兄の昂の第三子道豁が父のあとを継いだとあるが、斉、周、隋での活躍のほども不明のままである。また、乾の従兄たちも、反爾朱の挙義には翼、乾に従い、翼の長兄の子の永楽は、博陵太守になったが、東魏の天平年間に、反徒に虜となって自殺し、その子の長命も、武定中に侯景を討って戦死して、次兄の延伯だけが、北斉で安州刺史に征西将軍を加えられたが、まもなく歿した（北斉書、北史高允伝附高乾伝）。この系統は、歓への功労のために、慎の外叛にもその一房のほかは許されたのであるが、澄、洋の支配層への変動に結びつかず、衰退したようである。



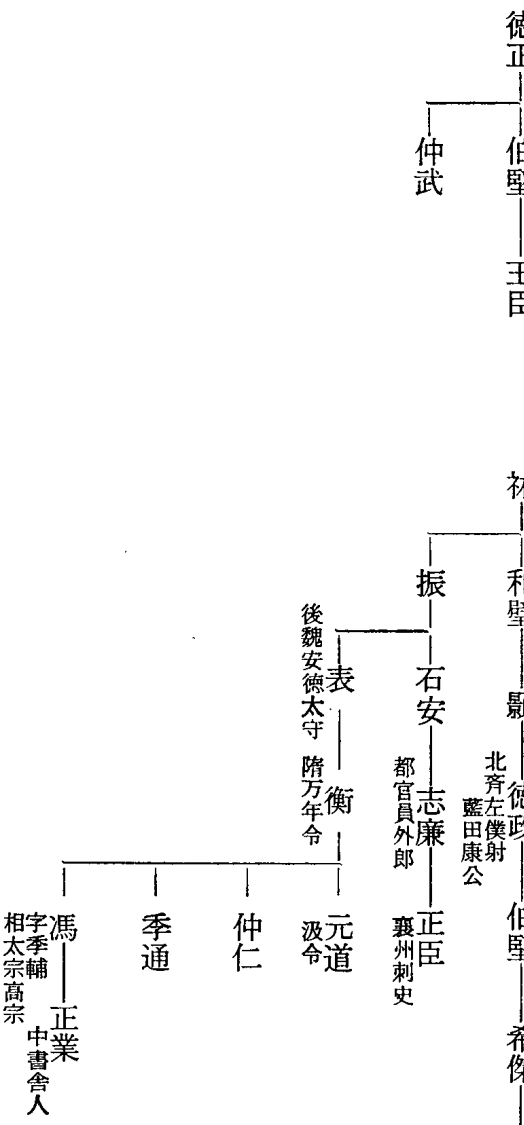

（北史、北斉書高乾伝）

この新しい政権の支配層の一人となったのが、徳正である。若い洋の腹心となり、困難な情勢から受禅を強行して、その文宣帝の擁立に成功し、さらに、建国当初の綱紀を引きしめて新政を展開したのは、楊愔らとともに徳正の功績であったが、楊愔と仲違いし、酒乱の文宣帝を強く諫めるあまり、天保十年（五五九）、ついに斬られた（北斉書、北史高允伝附高徳正伝）。この年、文宣帝も暴死し、翌年、楊愔が政変に除かれ、その孝昭帝がまもなく急逝して、北斉王朝は、わずか十年あまりで、その運命を定めたのである。

あいつぐこの事件は、漢人官僚に、政界の表面にたつことを躊躇させ、ひたすら保身をはからせることになる。[65]

徳正の妻と子の伯堅も殺された。北史に、嫡孫の王臣の襲爵と、給事中、通直散騎侍郎、次子の仲武の京畿司馬、

（北史高允伝附高徳正伝）




（新唐書宰相世系表　高氏）

平原郡守という官名だけが残っている。

なお、この系統だけは、唐初に馮が宰相にのぼったので、新唐書宰相世系表にのっている。馮、字は季輔、太宗の貞観二十二年（六四八）、中書令に遷され、かねて吏部尚書を検校し、高宗の永徽二年（六五一）、光禄大夫を授けられ、行侍中、太子少保を兼ねた（旧唐書巻七八、新唐書巻一〇四高馮伝）。

西魏へ走った慎は、侍中、司徒、さらに太尉になったが（北史高允伝附高慎伝）、そののちの消息はわかっていない。なお、このとき、西魏は慎を迎えて軍をおこし、邙山に東魏の軍を大いに苦しめたことは、周知のとおりである。

慎にわずかに先んじて、興和二年（五四〇）、賓が西魏に逃げている。賓の祖父の暠は、北魏の太和初年に、遼東から北魏に帰したというから（周書巻三七裴文伝附高賓伝）、崇、肇についだものである。この周書には、賓は渤海蓨の人、とあり、隋書巻四十一の賓の子の頴の伝には、高頴、みずからいう、渤海蓨の人なりと、とある。遼東へは、祖先が北辺に任官したために移ったというが、渤海蓨の地とも、あるいは崇らとも関係が認められず、高麗族説もあり、[66] 隋書のように疑わねばならない。しかし、賓の父の孝安は、北魏で撫軍将軍、兗州刺史を、賓は、西魏に移って鄀州刺史、驃騎大将軍、開府儀同三司などをつとめて、その才幹をうたわれた。とくに、頴は、隋の文帝の受禅とともに尚書左僕射となり、開皇十九年(五九九)、讒言に免ぜられるまで、朝政にあたって、陳を滅し、統一王朝の建設に寄与し、一代の名臣、真の宰相とうたわれた。

新唐書宰相世系表は、ほかに、倹や璩の系統と、京兆晋陵の高氏をおさめている。倹、字は士廉は、貞観氏族志の編纂に加わり、貞観十二年（六三八）、尚書右僕射（旧唐書巻六五、新唐書巻九五高倹伝）、六世くだって元裕が、大

中七年（八五三）以後、吏部尚書、渤海郡公、その子の璩が、咸通中（八六〇～八七三）、中書侍郎、同中書門下平章事となった（旧唐書巻一七一、新唐書巻一七七高元裕伝）[67]。が、倹は北斉の清河王の岳の孫で、これは渤海高氏ではない。京兆の郢も、宰相世系表は、北斉と同祖であるという[68]。

このように、渤海高氏の一門は、北魏ののち、ふたたび政界の第一線から、ほとんど姿を消すのである。それは、とくに允の系統に著しい。季式兄弟が天平中にも部曲千人、馬八百匹を擁し、兵器類も完備していたという郷里の勢力は、乾、慎、昂とあいついで去っても、急激に失われるものではなかろう。したがって、地方豪族としての渤海高氏の存在は、後世に及んだと思われる。

しかし、唐代には、すでに移住する家族も続出したであろうことは推察されるところで、その碑銘は、系図が正確にあとづけられないいま、そのまま信用はしがたいが、その先は渤海の人ながら、任官などのために移住したと記すものが多く[69]、後世の家譜もほぼ同様である[70]。

## 十一

以上、北魏代を中心として、渤海蓨県の名門といわれる高氏の系図を、おもに魏書列伝によってその支派ごとに確かめ、関連する問題に触れながら、北朝における漢人貴族の立場を考えてきた。ここで、この渤海高氏の盛衰を纒めて、これらの問題点を整理しておこう。

新唐書宰相世系表には、高氏の起源説から渤海高氏の成立、引きつづいて後漢以後のおおよその系譜が掲げられているものの、西晉まではそれがすべて確認できない。高氏は、魏晉の貴族とはいいがたいのである。

高氏一門でその存在がはじめて知れるのは、瞻と隠で、晉の光熙（三〇六）、あるいは永嘉のころである。このとき、すでに、郷党数千家を率いて行動している。その経済的な実力を示す資料を欠くが、のちの北魏代の状態と考えあわせて、相当に大規模な地方豪族であったことは疑うまでもない。

五胡の治下になると、協力を求められたのであろうが、高氏からもその治政に積極的に参加するようになり、おもに後燕で高官についた。そして、高氏が官僚貴族としての性格をもつのは、北魏一代である。それはまた、極言すれば、允一代ともいえるところが、特殊な存在であった。允は、宰輔の任にのぼって献身し、異例の信任をえながら、みずからも、子孫についても栄達を望まず、一族もまた、政界の表面にたつことを好まなかったようである。しかし、そろって学殖に富み、声望が豊かであれば、おのずからかなりの高官を命ぜられるもので、また、讜、祐、永楽、季式と、冀州中正があいついだので、門閥としての地位は確固たるものがあった。

したがって、このあいだに豪族的勢力はますます増大し、北魏末の戦乱期には、孝荘帝から尊皇反爾朱の力量を重んぜられ、兵力、軍備ともにこれに応じられるものを擁していた。高歓には、さらに、周辺の漢人諸豪族の統合力をかわれたのであり、それに貢献して北斉王室の基礎を固めるとともに、渤海高氏と高歓一族との結合の契機をつくったのである。

そうして、魏書高湖伝は渤海蓨人を称し、巻三十二に位置するに至る。魏収は、新王朝の実権者のひとりで、文宣帝の絶対の庇護のもとに、みずからこの編纂にあたった。つまり、北斉王室の高氏は、擁立する漢人官僚の合意のもとに、その一党である渤海高氏となり、その支配層の頂点に立ったのである。この支配層のなかには、一門から徳正がいた。魏書成立ののち、家門について論議がやかましかったのは、この貴族階層の編成上の問題による。そのため

に魏収は、このような作為の反面、本貫の認定に厳格で、聡が一門から脱落させられてもいる。また、魏書に高氏各派の伝が異例に分載されているのは、これらの事情によるものである。

しかし、乾と徳正とは、一門のなかでもかなり近親であるのに、政権との結合のうえで派を異にしたので、乾らの衰退と徳正らの新王朝樹立運動の推進とが相関し、しかも徳正が文宣帝に誅殺されて、高氏はさらに政界から遠ざかった。

これは、北魏末から東魏への漢人豪族、北斉の漢人官僚の動向[71]の、もっとも典型的なものである。高歓の覇業は、その率いる北人の軍事力に、河北の漢人豪族が協力して成ったのであり、北斉の誕生は、その基盤のうえで、上層の支配層が強引に交代したにすぎないともいえるであろう。したがって、その反動が、わずか十年でおこるのである。

北魏の建業にも、後燕からの漢人豪族の協力の功績が少なくなかった。このとき、高氏は、高湖伝が魏書巻三十二の位置を占めるほどには、活躍しなかったが、安定期に入るとともに、允の政治がその永続の根幹になった。しかし、それは允のぬきんでた人格によるもので、高級官僚一般の政治態度から生みだされるものではない。允のながい政治生命が、北朝の方向に影響して、孝文帝の諸政策に連なるともいえる。また、允が、一門から後継者をだそうとしなかったのも、子の昇官を固辞したのも、その一面なのである。その実質の当否はともかくとして、允は、公的にも私的にも、北朝において漢人官僚のとるべきひとつの態度を示したのである。

これにたいし、東魏、北斉への高氏の協力は、きわめて熱烈ではあったが、そして大きな功績をあげたが、短い期間で大きく後退させられた。ここにも、北朝の官人官僚の態度を示唆するものがある。しかし、その活躍の母胎が、時代も、組織的にも異って、ここではそこまで論じおよばなかったが、制度上などで、後世への影響が少くなかった

といえよう。魏収の魏書も、その産物のひとつではある。

このように、渤海蓨の郡望の高氏をとりあげて、関連する諸問題を考えてきた。主題が北朝の漢人貴族の問題にかたよったのは、その活躍がほぼ北魏に限られたからである。

## 註

一

(1) 尾崎康・魏書成立期の政局（史学・三四―三・四・一九六二年）。

(2) 浜口重国・高斉出自考―高歓の制覇と河北の豪族高乾兄弟の活躍（上、下）（史学雑誌・四九―七、八・一九三八年）。

(3) 大沢陽典・北魏高令公伝小攷（橋本博士古稀記念東洋学論叢・立命館大学人文学会・一九六〇年）、浜口重国・高斉出自考（下）。

(4) 系図についても、浜口氏に負うところが大きい（浜口重国・高斉出自考・（上））。

二

(5) 元和姓纂巻五。

(6) 文苑英華巻八九二。金石萃編巻一一四。

(7) 荘公九年（左伝）、二二年（経伝）、閔公二年（経伝）。

(8) 固　宣公五年（経伝）、一四年（左伝）、一五年（経伝）、一七年、成公二年（左伝）。
厚　襄公六年、八年、一〇年、一六年（左伝）、一七年、一九年（経伝）。
止　襄公二九年（経伝）。

(9) 鄧名世・古今姓氏弁証巻一一。

(10) 北史巻五六魏収伝、巻四三李崇伝附李庶伝。なお、魏書成立期の政局・五五頁に簡単に触れておいた。

(11) 守屋美都雄・六朝門閥の一研究―太原王氏系譜考―（日本出版協同株式会社・一九五一年）。

(12) 矢野主税・鄭氏研究（社会科学論叢・八・長崎大学学芸学部・一九五八年）。
(13) 矢野主税・韋氏研究（社会科学論叢・一一・長崎大学学芸学部・一九六一年）。
(14) 竹田竜児・門閥としての弘農楊氏について（史学・三一―一～四・一九五八年）。
(15) 北史巻三一高允伝。
(16) 洪适・隷釈巻二七、陳思・宝刻叢編巻一。
(17) 三国志魏志巻二四高柔伝、晉書四一高光伝。矢野主税・魏晉百官世系表（第一分冊）六五頁。
(18) 趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈（中国科学院考古研究所・考古学専刊乙種二・科学出版社・一九五六年）図版三一五。
(19) 趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈巻七、北斉書巻五〇恩倖高阿那肱伝。
(20) 太平御覧巻四八七所引・崔鴻・十六国春秋、湯球・十六国春秋輯補・前燕録四・慕容儁元璽元年（晉永和八年・三五二）。なお、明の屠喬孫らの偽作といわれる百巻本の十六国春秋の巻三一前燕録九は、この二人を瞻の子とし、湯休もそれに従っているようであるが、その根拠はわからない。

三

(21) 尾崎康・魏書成立期の政局・五四頁、五七頁。
(22) 魏書巻二四張袞、崔玄伯、鄧渊伝、巻二八李栗、劉潔、張黎伝、巻三〇王建伝。
(23) 谷川道雄・北魏末の内乱と城民（下）（史林・四一―五・一九五八年）六三頁。
(24) 崔綽伝は、盧斐の抗議の引きあいにだされて、子の崔鑒の伝と改められた（北史巻五六魏収伝）。崔綽についての記事は削られたらしいが、その位置はかわらない。
(25) 京北の杜銓（魏書巻四五）、西河の宋宣（巻三三宋隠伝附）も、同時に中書博士に抜擢された。
(26) 周一良・魏収的史学（燕京学報・一八・一九三五年）一三六頁。

四

(27) なお、浜口氏は、恆が、渤海高氏ではないことはもとより、湖の弟であるということも、否定していられる。恆の曾孫の隆之は、歓によって従弟とされたのであるが、魏書編纂の総監者であった。
(28) 姚薇元・北朝胡姓考（北京・科学出版社・一九五八年）一三四頁。

(29) 魏書巻一一〇慕容儁載記、巻一一一慕容暐載記附慕容恪載記、巻一二三慕容垂載記、巻一二四慕容雲載記など。そのなかで、とくに、慕容恪の母が高氏であり、慕容雲は高句麗族から雲の養子となったものである。

(30) 姚薇元・北朝胡姓考・一二六頁。

(31) 北斉書巻一神武紀上、北史巻六斉本紀上。なお、高歓の姉は、尉景に嫁いでいる。

(32) 猛虎の子の建（字は興国）の妻の王氏は、太原祁の人である（高建妻王氏墓誌・趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈・図版一九七）。

(33) 遺存のこの一族の墓誌は、すべて北斉以後のもので、その北斉代のものは、帝室であるから、鄴都の附近に出土している。

建　天保六年（五五五）一〇月　鄴城之西北十里、潼水之陽　（湖—各拔—猛虎—建）
濟　乾明元年（五五九）四月　鄴城之西北二十八里　（歓—濟）
百年　河清三年（五六四）三月　鄴城之西十有一里　（歓—演—百年）
肱　天統二年（五六六）二月　鄴北紫陌之陽　（湖—真—賭児—香—永楽—肱）
〔僧護　武平四年（五七三）一一月　鄴城之西紫陌河之北七里　（阿那肱—僧護）〕
（趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈・第四冊）

(34) 魏書巻八三下、北史巻八〇・外戚高肇伝。なお、第九節で触れる。

五

(35) 大沢陽典・北魏高令公伝小攷。

(36) 魏書巻四七盧玄伝。

(37) 資治通鑑巻一二二宋紀文帝元嘉八年。

(38) 谷川道雄・北魏官界における門閥主義と賢才主義（名古屋大学文学部十周年記念論集・一九五八年）。

(39) 鄧頴・延和元年（四三二）、宋宣・二年二月、盧玄・一二月、游雅・太延二年（四三六）、邢頴・太平真君元年（四四〇）、張偉・二年、宋愔・六年。いずれも、魏書巻四世祖太武帝紀上下。

(40) 太平真君五年（四四五）。

(41) 趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈巻・図版二五一。趙氏の考証されたように、推とは別人であろう。
(42) 魏書游雅伝。
(43) 魏書巻八四儒林刁沖伝。巻三八刁雍伝。北史巻二六は、雍を雝につくる。

六

(44) 魏書と北史の高允伝は正につくり、北斉書高徳政伝は政につくる。
(45) 北斉書巻二一高乾伝、北史巻三一高允伝附。
(46) 北斉書巻二一封隆之伝には、

乾等、以隆之素為郷里所信、乃推為刺史。

とある。

七

(47) 宋書巻七六王玄謨伝。
(48) 平斉戸については、塚本善隆・北魏の僧祇戸・仏図戸（東洋史研究二―三・一九三七年、支那仏教史研究北魏篇・所収）などがある。
(49) 魏書はまた雲長ともいい、北史には雲とある（巻四〇高聡伝）。
(50) 司馬紹墓誌・永平四年（趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈・図版二〇九）、司馬昞妻孟敬訓墓誌・延昌三年（同・図版二三一）、司馬昞墓誌・正光元年（同・図版二三〇）。紹、字は元興、昞、字は景和は、父子で、司馬叔潘の孫、曾孫にあたる。
(51) 魏書劉藻伝には、永安中、とあるが、皇后文成皇后李氏伝、外戚李峻伝による。

八

(52) 先に、太武帝は、沮渠牧犍の姉妹を夫人、あるいは右昭儀としてい、また、妹の武威公主を牧犍に妻あわせていた（太延三年・四三七）。太延五年、牧犍は北魏に降ったが、この夫婦の女が、潜の尚した武威公主で、沮渠祖の系統のほかには、ひとり族誅を免れたのであろう（魏書巻九九盧水胡沮渠蒙遜伝附沮渠牧犍伝）。
(53) 兄の謙之に、涼書一〇巻の著作もある。
(54) 姚薇元・北朝胡姓考・二七二頁。

(55) 謙之の仲間に、陳郡の袁翻（魏書巻六九）、河内の常景（魏書巻八二）、范陽の麗道元（魏書巻八九酷吏）、晉の大将軍の温嶠の後と自称する温子昇（魏書巻八五文苑）らがい、みな当世の名輩として、恭之とともに御史に選用されたものに、趙郡の李希宗（魏書巻三六李順伝附）、李絵（北斉書巻二九李渾伝附）、北平の陽斐、陽休之（北斉書巻四二）、封述（北斉書巻四三）河間の邢昕（魏書巻八五文苑）、武邑の蘇淑（魏書巻八八良吏）、広平の宋世良（北斉書巻四六循吏）らの名があげられている。いずれも文学の士である。

九

(56) 肇の妹は、高句麗でに生まれ、一三のとき、竜城鎮で孝文帝にみそめられた。皇子恪の誕生が、太和七年（四八三）閏四月である。二〇年、太子恂は叛を謀って廃され、翌年正月、恪の立太子となり、母として養おうとする馮后のために、高氏は殺されたらしい。二三年四月、宣武帝恪の即位とともに、文昭皇后と追尊した（魏書巻七高祖孝文帝紀下、巻八世宗宣武帝紀）。

(57) 営州刺史高貞碑（金石続編巻一）、孫星衍記（金石続編巻一による）。

(58) 高植墓誌（趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈・図版二二七）・神亀年間（五一八～九）、田雯・長河志籍考（金石萃編巻二九による）、重修徳州志巻一一（王道亨等・乾隆五五年）。

(59) 高湛墓誌銘（趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈・図版二九三）・東魏元象二年（五三九）、銭大昕・潜研堂金石文跋尾（金石萃編巻三〇による）。

(60) 姚薇元・北朝胡姓考・二七二頁。

(61) 姚薇元・北朝胡姓考・一五〇頁。

(62) 趙万里・漢魏南北朝墓誌集釈巻七・図版三一五。

(63) 北斉書巻一九高市貴伝。

(64) 北史巻九二恩幸、北斉書巻五〇恩倖高阿那肱伝。

十

(65) 顔之推・顔氏家訓止足篇第一三。

(66) 姚薇元・北朝胡姓考・二七〇頁。

(67) 前掲の高元裕碑（金石萃編巻一一四）がある。

(68) 新唐書巻一六五高郢伝には、

其先、自渤海、徙衛州、為衛州人。

とある。

(69)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 高　某 | 其先渤海蓨人、因仕、居洛陽、今為陽翟人。 | 天授二年歿 | 文苑英華巻九六〇高賛府墓誌 |
| 高武光 | 其先渤海人。 | 大暦七年歿 | 文苑英華巻九二三晋州刺史高武光碑 |
| 高　則 | 其先渤海人、後代因官、遂家于涇州之安定県。 | 上元三年歿 | 文苑英華巻九一〇唐上騎都尉高則碑 |
| 高崇文 | 其先太公之胄、自敬仲得姓、而望於渤海。今則為幽潞人。<br>其先渤海人、崇文、生幽州。<br>其先、自渤海、徙幽州。 | 元和四年歿 | 文苑英華巻八九二南平郡王高崇文神道碑<br>旧唐書巻一七〇高崇文伝<br>新唐書巻一五一高崇文伝 |

(70) 現存の清、民国の高氏家譜は、江蘇、浙江方面の高氏のものが多く、現住地には宋の南渡にともない、あるいは明代に移ったなどとするが、より信じがたいにしても、ほとんど、その祖を渤海高氏、または、そういわなくても高柴（子羔）としている。

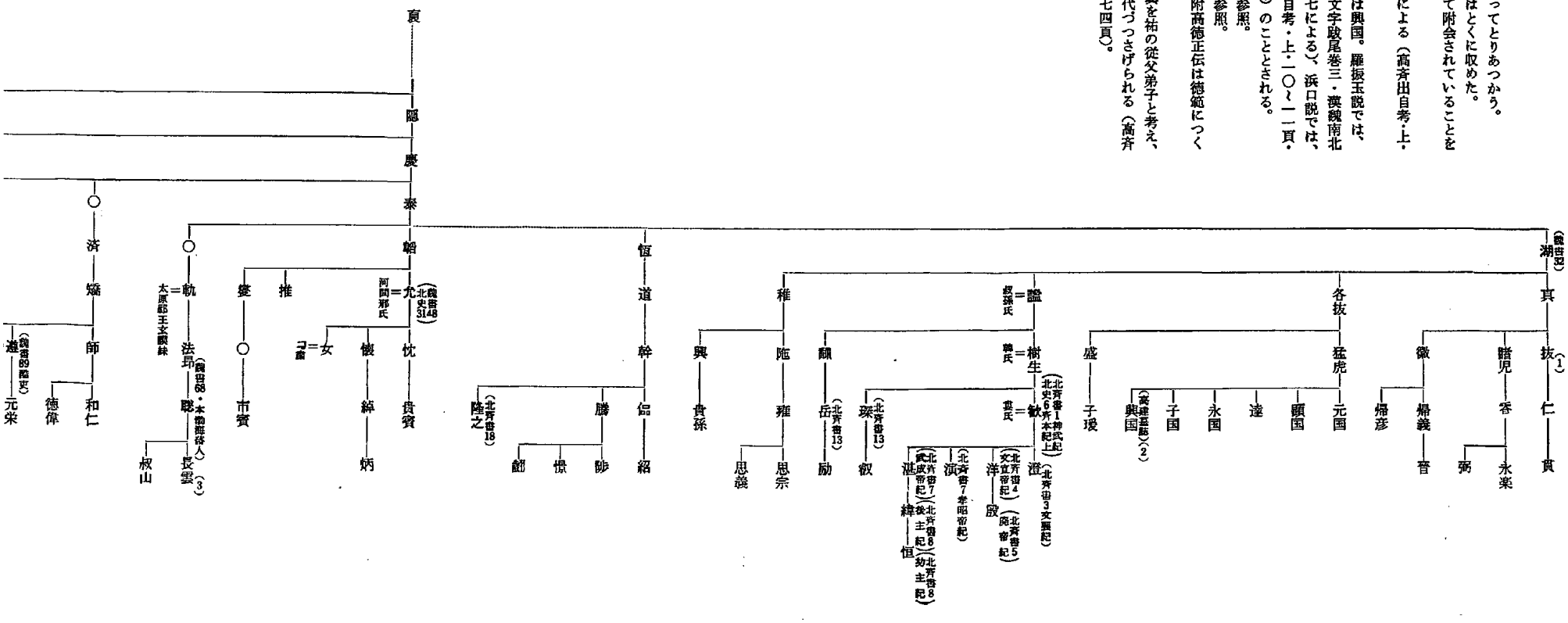
十一

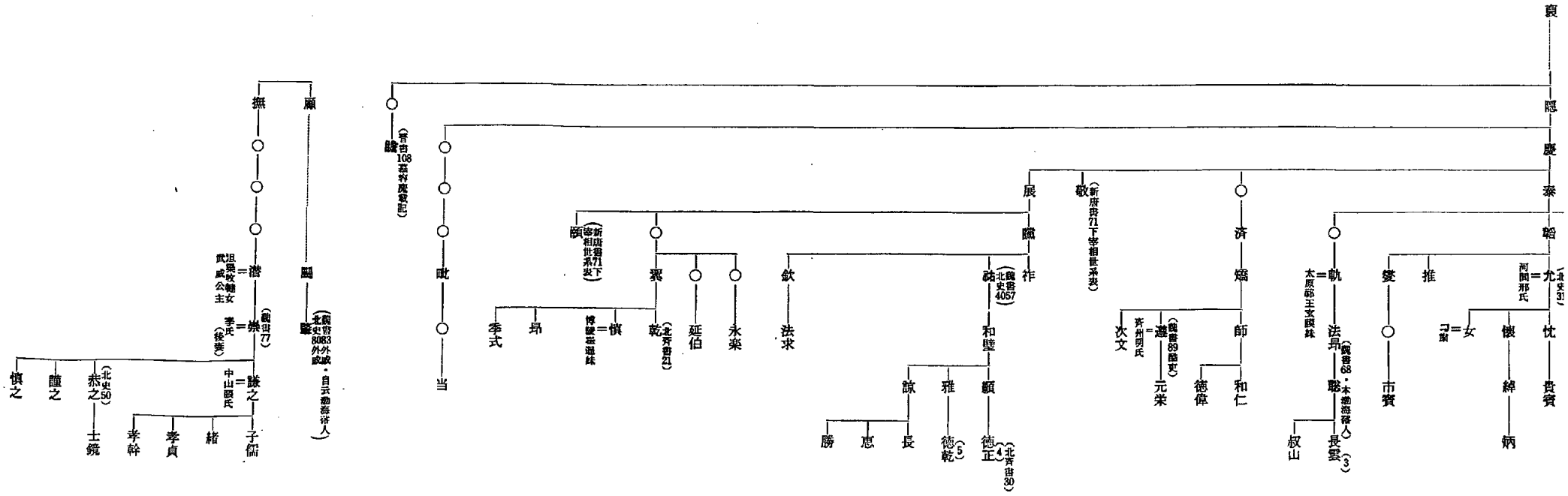
(71) 谷川道雄・北斉政治史と漢人貴族（名古屋大学文学部研究論集二四・史学九・一九六二年）、尾崎康・魏書成立期の政局。

# 北魏における渤海高氏系図

ほとんど北魏代に限ってとりあつかう。
ただし、北斉の諸帝はとくに収めた。
点線は、事実に反して附会されていることを示す。

註(1) 浜口重国氏による（高斉出自考・上・三～七頁）。
(2) 諱は建、字は興国。羅振玉説では、遠（曾堂金石文字跋尾巻三・漢魏南北朝墓誌集釈巻七による）、浜口説では、子国（高斉出自考・上・一〇～一一頁・註六、三三頁）のこととされる。
(3) 本文註(49)参照。
(4) 本文註(44)参照。
(5) 北史高允伝附高徳正伝は徳範につくる。
(6) 浜口氏は、翼を祐の従父弟子と考え、翼以下を一世代づつさげられる（高斉出自考・下・七四頁）。




裒
隱
慶
泰
韶
允（北史31）
問間邢氏
忱
貴賓
懷
綽
炳
女＝
斐
推
市賓
軌＝
太原邵王玄暎妹
法昇（魏書65・本勃海蓨人）
聰
長雲（3）
叔山
濟
熔
師
和仁
德偉
遵（魏書89酷吏）
齊州閔氏
元栄
次文
敬（新唐書71下宰相世系表）
展
臨
祚
融（魏書4057）
和璧
顧
德正（4）（北斉書30）
雅
德乾（5）
諒
長
恵
勝
欽
法求
永楽
延伯
寇
乾（北斉書21）
博陵崔遵妹
慎＝
昂
季式
頤（新唐書71下宰相世系表）
（晉書108苻堅載記）
膺
吡
当
廟
闕（魏書83外戚・北史80外戚・自式勃海蓨人）
撫
澹
沮渠牧犍女
武威公主
李氏（後妻）
機（勃書77）
謙之
中山眞氏
子儒
緒
孝貞
孝幹
恭之（北史50）
士鏡
醯之
慎之